

# 白い門のある家

小川未明

青空文庫



静かな、春の晩のことでありました。

一人の男が、仕事をしていて、疲れたものですから、どこか、喫茶店へでもいって、コーヒーを飲んできたいという心が起こりました。

男は、家の外へ出ました。往来は、あたたかな、おぼろ月夜で、なにかかも夢を見ているようなようです。あちらの高い塔も丘も空も森も、みんなかすんで、黒くぼんやりと浮き出して、じつとしていたのです。

彼は、町へ出てから、はじめて、夜が、もう更けているのに気づきました。いままでへやの中で仕事に心をとられていたので、

時刻のたったのがわからなかったのでした。町には、あまり人も歩いていません。また、この時分まで、店を開けている家も見当たらなかつたのでした。

「もう、あの家も、起きていまい？」

彼は、顔なじみのカフェーが、もう戸を閉めてしまわないかと思いました。その方へぶらぶらと歩いていきました。彼は、歩きながら空を仰いで、なんという、いい夜の景だと感歎いたしました。

その町にある、彼のいこうとした、喫茶店は、もう戸を閉めてしまったのです。彼は、その家の前まできてがっかりしました。

しかたなしに、彼は、いま歩いてきた道をふたたび帰ろうとし

ました。そのとき、ふいに、彼のうしろで足音が聞こえました。だれだか、歩いてくるのでした。

「こんばんは、お疲れさま。」と、うしろから呼びかけました。彼は、このとき、立ちどまって、だれだかと振り向きましました。うしろから歩いてきた人を、彼は、知らなかつたのであります。

「こんばんは。」と、彼も答えました。

すると、相手の男は、さも親しそうに、彼のそばへ寄り添ってきて、

「私は、この町内に住んでいるものです。疲れたもので、コーヒ―を飲もうとしてきたのですが、もう戸が閉まっています。やはり、あなたも、そのおつもりでいらしたように見えましたがい

い喫茶店をご案内いたしましたしょう。」といたしました。

彼は、知らぬ人から、こういわれたので、ためらいました。しかし、町内のものであるということ、また、この人は、人のよさそうであること、もう一つは、自分と同じように、この人も仕事に疲れて、休息を求めにきたということ、そんなことが、なんとなく、親しみを感じさせたので、

「じつは、私も、散歩がてら、コーヒーを飲みに行ったのですが、もう戸が閉まっていましたのです。」と、彼はいいました。

「この辺の町は、あまり客がないとみえて、早く寝てしまいますね。春の晩などは、もつと起きていてくれるといいのですが。」と、相手の男は答えました。

「もう、そんなに、おそい時刻でしょうか。」

「まだ、十二時前です。」

彼は、相手の男が、十二時といつたので、もう、寝てしまおうのは、あたりまえだというような気もされました。そして、家へ帰って、自分も眠ろうと考えました。

「なに、ご案内しようという店は、すぐこの裏通りですよ。ごく新しく開いたので、ちよつと居心地のいい家ですから、お知りなさっておいてください。」と、相手の男はいいました。

彼は、こうまでいわれると、その男といっしょにいかなければ、なんとなくすまないように思つて、

「では、お伴いたしましょう。」といいました。

二人は、並んで、話しながら、ある横丁をまがりました。彼は、いままでにも、たびたびこのあたりを通ったことがあります。今夜は、どうしたものか、その町が、ばかに美しくなつて目に映つたのです。彼は、月の光が、こんなに、すべてのものを美しく照らしてみせるのだらうと思ひました。やがて、二人は、明るい、店の前まできました。

「この家ですよ。」と、いつしよにきた男がいました。

入り口には、すがすがしい緑色のカーテンが垂れています。内へはいると、なんの花か知らないが、香においの高い花が、たくさんびんに活いけてありました。そして、あちらのテーブルに、三、四人の客が、腰をかけて話をしていました。また、どのへやからか、



低いマンドリンの音が流れてきたのでした。

彼と相手の男は、一つのテーブルに向かい合って掛けました。

このとき、彼は、はじめて、相手の男の顔を、はつきりと燈あかりの下で見ることができました。そして、あまり、その男の顔が、小さい時分に別れた自分の従兄いとこに似ているのでびっくりしました。従兄は、南洋の島で亡くなったので、もちろん従兄の生きているはずはないのであるが、なんとなく彼は、慕したわしい気がしました。「あすこにいるのは、みんなよくここへやってくる人たちなんですよ。」と、相手の男は、いいました。

彼は、その人たちを見ると、どの顔も、かつて一度は、どこかで見たとがあるように思われたのでびっくりしました。しかし、

どこであつたということも、またいつであつたということも、思  
い出せなかつたのであります。

「不思議な晩もあるものだ。こう、あう人々の顔が、みんな見覚  
えのあるような気がするのは、いったいどうしたことだろう……  
。」と、彼は、自分の目を疑つたのであります。

そのうちに、相手の男は、あちらにいる人たちと顔を見合わし  
て、あいさつをしました。そして、「ちよつと。」といつて、座  
を起<sup>た</sup>つて、あちらへいききました。

彼は、さつきから、奥の方できこえるマンドリンの音に、耳を  
傾けていました。なんといい音色だろうと思つたのです。こ  
れを聞いていると、遠い昔のことなど思われて悲しくなりました。

そして、だれが、いったいそれを弾いているのかと思ったりして  
いました。そのうちに、ぴったりとマンドリンの音がやみました。

そのとき、目の前へ、美しい、若い婦人があらわれて、その人  
は、彼の方へ、にこやかに笑いながらまいりました。

「あなたは、もう、私をお忘れになつたでしょう？」と、婦人は  
いって、彼の前にきて腰をかけました。

「あなたは、いつも、私が、マンドリンを弾いている窓の下を通  
つて、学校へいらつしやいました。そして、ある日、雨が降つて、  
あなたは、たいそう困つておいでになりました。私は、あなたに、  
かさをお貸ししました。あなたは、そののち、私に、きれいな本  
を持ってきてくださいました。その本には、たくさんの美しい絵

がはいっていました。昔の伝説や、詩や、童謡や、お話や、いろいろなものが書かれていたのだけれど、外国の言葉で、私にはわかりませんので、ただ、私は、そのきれいな絵ばかり見ていました。あなたに、うかがったら、この本は古い書物で、字引きにもないような文字があるので、翻訳することは困難だとおっしゃいました。私は、まだ、その一つの みずぐるま 水車が森の中にまわって、白い花が咲いて、赤い鳥の飛んでいた絵などは、目に残っています……。」と、彼女はいいました。

彼は、この話をきくうちに、十年ばかり前のある日のことを思い出しました。そして、どうして、忘れていたそのころの人をふたたび、今夜は見ることできたらうと不思議に思ったのでした。

「私は、すっかり忘れていました。ほんとうに、そんなことがあります。いま、あの時分のことを、思い出しました。」と、彼はいつて、過ぎ去った日をなつかしく思ったのであります。

「私は、ときどき、ここへまいります。今夜は、もうおそくなりましたから、帰ります。ちようど車もきたようですから、これで失礼いたします。いつかお目にかかります。」と、その婦人は、いつて出ていきました。

時計が、十二時半を打つと、みんなが帰りかけました。彼は相手の男といっしょに、そのカフェーから出たのであります。

「ちよつと、気持ちのいいカフェーではありませんか。お気にいりませんでしたか？」と、相手の男は、たずねました。

「しんみりとした、いいところです。私は、今夜は珍しく、見覚えのある人にあつて、いろいろなことが思い出されてなりません。」と、彼は答えました。

二人は、おぼろ月夜の世界を話しながら歩いて、四つ辻のところへきました。すると、相手の男は、

「私の家は、これから三軒めの奥にはいったところです。どうか、お遊びにいらしてください。」といいました。

彼は、ちょうど、その前を通りますので、男のはいつていくうしろ姿を見送りますと、白い門が立っていました。男は、だんだんと、白い門から、内の方へはいつていきました。

彼は、家に帰って、眠りにつきました。

それから、数日もたった、後のことです。ある晩、彼は、男につれられていったカフェーを思い出しました。緑色のカーテンの垂れているカフェーに、もう一度いつてみたくなりました。そこで、彼は、ひとりで出かけたのでした。たしかに、あのとき通った道を歩いていったのですけれど、どうしたことが、そのカフェーが見当たりませんでした。彼は、幾たび同じ町をうろついて、緑色のカーテンのかかっている喫茶店を探したかしれません。

「あの男の家は？」と、彼は、こんどは、白い門のあつた家をたずねていきました。しかし、この家も見当たらなかつたのです。四つ辻に立って、彼は、三軒めの家をかぞえてみましたけれど、どこにも白い門のある家がなかつたのでした。

彼は、近所の人に、たずねてみました。

「ここらには、白い門のある家はありません。」と、人々は、答えました。

彼が、このことを家の人や、友だちなどに話をすると、だれも笑って、ほんとうに聞くものはなく、

「夢を見たのだろう。」というのでした。



# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑  
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「赤い鳥」

1925（大正14）年5月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 白い門のある家

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>